VOL.26
NEWSLETTER 2016

特定非営利活動法人　産学連携学会 ニュースレター

J-SIP

Japan Society for Intellectual Production

CONTENTS

1. [特集]

特集１／産学連携学会第１４回大会とその開催地、浜松
産学連携学会第１４回大会実行委員会

特集２／テキスト「産学連携学入門」（改訂版）発刊
産学連携学会　会長　小野 浩幸（山形大学）

2. [TOPIC]

TOPIC １／関西・中四国支部「研究・事例発表会」を開催
産学連携学会関西・中四国支部　幹事　石塚 悟史（高知大学）

TOPIC ２／北海道支部セミナー「『食と健康』イノベーション」を開催
産学連携学会北海道支部　代表　荒磯 恒久（北海道大学）

3. 輸出管理DAY for ACADEMIAの共催

4. 会告／諸報・ご案内

特集1

産学連携学会第14回大会とその開

14th Annual Meeting of Japan Society for Intellectual Production

産学連携学会第14回大会実行委員会

大会の概要

産学連携学会第14回大会は、来る6月16・17日の2日間にわたり浜松市を舞台に開催されます。一般講演とポスターセッションでは、これまで同様、関連する多様な関係者が一堂に会し広く産学連携に関する情報交換・議論を行います。また、「地方創生」「医工連携」などに焦点を当てた特別講演・シンポジウム・オーガナイズドセッションも設定しています。その他、当学会と連携協定を結んだ韓国の産学協力学会との日韓ワークショップも予定しています。

エントリー方法をはじめ詳細につきましては、学会ホームページ（http://j-sip.org/index.htm）もしくは大会事務局までお問い合わせください。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

特別講演

「光への挑戦 ー光は新産業の糊であるー」（仮題）
講師／浜松ホトニクス株式会社 代表取締役社長　畫馬 明 氏

シンポジウム

「地方創生における産学官連携」（仮題）

人口減少や超高齢化社会への突入に加え、これらが地域経済の縮小に拍車をかけるなど、地方は多くの課題を抱えています。このような状況の中で地方創生が唱えられていますが、地域がそれぞれの特徴を活かして持続的な社会を創生していく上で、地域で活躍する人材の育成、地域産業の活性化、そして地域の魅力の醸成など、地域における大学の果たす役割に大きな期待が寄せられています。そこで、本シンポジウムにおいては、地方創生における産学官連携の課題や意義について議論し、未来を展望します。

オーガナイズドセッション

○『地方創生に向けた社会連携』（仮題）
○『医工連携の課題とその解決策』（仮題）

日韓ワークショップ

産学連携学会は、平成25年11月に韓国産学協力学会と国際交流協定を締結しました。これを受け、本大会では両学会の連携に対する期待について議論する日韓ワークショップを実施します。

大会までのスケジュール

平成28年4月　7日（木）	予約参加登録締切、発表申込締切
平成28年4月14日（木）	一般講演、ポスターセッション発表要旨原稿締切
平成28年6月　9日（木）	一般講演発表原稿締切
平成28年6月16日（木）～17日（金）	産学連携学会第14回大会

［ 日時 ］
平成28年6月16日（木）、17日（金） 2日間
※尚、6月16日（木）は18時30分より情報交換会を開催いたします。

［ 会場 ］
アクトシティ浜松
（静岡県浜松市中区板屋町111-1）

［ 発表申込期限 ］
平成28年4月7日（木）

［ 大会事務局 ］
産学連携学会第14回大会実行委員会
（静岡大学イノベーション社会連携推進機構内）

〒432-8561静岡県浜松市中区城北3-5-1
静岡大学イノベーション社会連携推進機構
TEL/ 053-478-1702
FAX/ 053-478-1711
E-mail/ sangaku2016@cjr.shizuoka.ac.jp

大会長／　伊東 幸宏
静岡大学長
副大会長／　今野 弘之
浜松医科大学医学部附属病院長
実行委員長／木村 雅和
静岡大学 理事・副学長
イノベーション社会連携推進機構長

催地、浜松

浜松市の紹介

東京と大阪のほぼ中間に位置する浜松市は、人口82万人、面積は全国2位を誇る政令指定都市です。浜松人には『やらまいか精神』(やってやろうじゃないか精神)が脈々と受け継がれ、数々の日本初、日本一の技術(製品)を創出してきました。現在浜松市は、世界を舞台に活躍する大企業や、高度なオンリーワン、ナンバーワン技術を有する中小、ベンチャー企業が集積する日本有数の産業集積都市となりました。さらに、世界的楽器メーカーが集まり、楽器の一大生産地であることから、大小様々なコンクール、コンサートが開催され、世界の人々が音楽の豊かさや楽しさを求めて集まる「音楽の都」へと、さらなる発展を遂げようとしています。

また浜松市は、東は天竜川、西は浜名湖、南は遠州灘、北は天竜美林など、豊かな自然に囲まれています。年間の日照時間が長く、温暖な気候に恵まれているため、海の幸、大地の幸、山の幸が豊富な地域です。

産学連携学会を機会に、浜松市の魅力を是非肌で感じてください。皆さまのお越しをお待ちしております。

浜松市楽器博物館

浜名湖

浜松城

静岡大学の紹介

静岡大学のビジョンは「自由啓発・未来創成」です。
自由な風土の中で自律的に学問を追求していくという学びの姿勢、その考えを発展的に継承し、未来への想いを込めたのが「自由啓発・未来創成」という理念です。静岡大学は、多様な背景・価値観を認め合い、気高い使命感と探求心に溢れた豊かな人間性をはぐくみ、知の創成・継承・活用を推進し、地域社会と共に発展していきます。

浜松医科大学の紹介

浜松医科大学は、社会に貢献し、かつ、世界に光医学を中心として研究成果を発信する特色のある大学を目標として発展してきました。県内唯一の医科大学として、社会から期待される役割と機能を十分に果たすべく、本来の目的である教育研究の質の向上を図り、光技術等を用いた先進的医学研究を産学連携により発展させ、地域に根ざした「光医学分野で日本・世界をリードする大学」を目指します。

特集2

テキスト「産学連携学入門」（改訂版）発刊

産学連携学会　会長　小野 浩幸（山形大学）

今般、テキスト「産学連携学入門」（改訂版）を発刊しました。既刊のテキスト発刊から7年余が経過し、その間の変化を踏まえた改訂版を求める声が高まったことを受けて改訂することとなったものです。改訂版といっても、総ページ数が前版の約２倍、上下２巻にわたる全面的なリニューアルとなっています。執筆いただいた多くの方々に対し、改めまして深く感謝申し上げたいと思います。ニュースレターの貴重な紙面をいただきましたので、このテキストを多くの人に活用していただきたいという思いをこめて、編集に携わった一人として編纂の意図と内容について少し述べさせていただきたいと思います。（以下は、個人的な思い入れが多々含まれていることを予めご了解ください。）

今回の改訂版では、前版と同様に「産学連携の“現場”と“学術的側面”の双方に有益な知見を入門者でも興味深く理解できるよう平易な言葉で提供する」ことを意図しています。昨今の産学連携をめぐる環境の変化は目覚ましく連携活動も多様さを増しています。このような変化を捉えるにはどうしたらよいか、さらに単にトピックスを追うだけにとどまらず普遍性をも兼ね備えたものにするにはどうしたらよいか、この点で編集会議では頭を悩ませることになりました。結果として、産官学の多方面で活躍する約60名もの執筆者によるオムニバス形式を採用し、その多様性そのままに本書をまとめることになりました。

なぜ、オムニバス形式にしたのか。これについて、改訂版の内容について少し触れることとしましょう。改訂版は４つの編により構成されています。第一編では、わが国の産学連携に関する「仕組みと制度」を歴史的視点から取り上げています。第二編では、「地域システム」をテーマに制度と個々の事例の間に位置する連携の仕組みづくりに関する取り組みを集めています。第三編では、「産学官連携の実務」に関した内容を主に大学実務の視点から取り上げています。第四編では、個別の「産学官連携の事例」を分野ごとに執筆者を募って記載しています。

このような構成としたのは、読み手の人たちの立場が多岐に渡ることを想定し、それぞれの立場の人がその目的に沿って読むことができるようにしたものです。例えば、政策立案に携わっている人であれば、第一編は政策の流れを知るために有効なものと思います。各地方自治体等で産学連携による事例が多く生まれるような仕組みを創りたいと考える人にとっては、第二編が参考となる事例を提供してくれるものと思います。大学等に勤務する職員で初めて産学連携実務に携わることとなった人にとっては、第三編は全体を把握する上で重宝することでしょう。産学連携プロジェクトに関与する人にとっては、第四編を読むことによって手っ取り早く多くの先行事例を知ることができます。オムニバス形式の利点として、読み手の興味にしたがって好きなところから読むことができます。このようにして、産学連携の「現場」に有益な知見を提供できるように配慮しました。

上下2巻となったテキスト「産学連携学入門」（改訂版）

テキスト産学連携学入門　改訂版　目次

第１編　産学連携を促進する政策と制度

第２編　地域システム
　第１部　主導的役割を果たす主体に着目した様々な連携事例
　第２部　産業区分を超えた産学連携システム

第３編　大学の仕組み

第４編　プロジェクト事例編

ちなみに、オムニバスとは、複数の独立した内容を共通した方向性をもって一つにまとめた形式を指します。フランス語の乗合馬車が語源とされていますが、さらに遡ると「すべての人のために」を意味するラテン語のomnibusに行き当たります。この産学連携学入門が、産学連携に携わる「すべての人のために」少しでも貢献するものとなることを願うものです。

一方で、このテキストを手にした人たちには、ぜひ一度は全体を通して読んでいただきたいと考えています。産学連携学は社会的現象をその対象領域としています。したがって、個々の産学連携事例は、関係者の能力や意欲、資金、技術などの内部の条件に大きく由来します。と同時に、それを取り巻く環境や仕組み、制度、慣習や文化といったものに強く影響を受けています。このような、いわゆる『ミクロ・メゾ・マクロ・ループ』というものを強く意識することも産学連携学では重要と考えます。改訂版の４つの編からなる構成は、そのことを感じていただくことを意識したものとなっています。例えば、初めて産学連携実務に従事することとなった人は、まずは必要性から第三編を丹念に読み進めることとなると思います。そのうえで、このようなルールがどのような経緯と考え方で生まれてきたのかということを第一編で知ることができます。

ミクロ・メゾ・マクロ・ループ

ところで、「学術的側面における有益な知見」の提供という点については、今回は、概念的な論理を積み重ねた知見や説明をあまり多く掲載していません。「入門用テキスト」ということを意識したからではありますが、ぜひ、概念的論理の構築の部分は読み手である皆さんに行っていただきたいと思っています。

「産学連携学」を標榜する以上、多くの産学連携事例に通ずる概念を事例観察から読み解き、その概念を仮説として定量・定性双方のデータから検証し、有用な概念を実際の産学連携事例に還元していく、このような観察・仮説・検証・還元のループが求められることは言うまでもありません。もとより、産学連携学は未だこれらループ構築の途上にあるわけですが、今回の入門改訂版の発刊が、ループ構築のための議論の活発化につながることを期待するところです。

入門改訂版は有償頒布となるものですが、学会理事会の賛意を得て、学会員の皆様には発刊にあたって無償にてお届けすることとなりました。これまで、学会を支えていただいた多くの学会員の方々に、感謝の気持ちをこめてお送りします。ぜひ、ご活用いただければ幸いです。

TOPIC 1

関西・中四国支部「第7回研究・事例発表会」を開催

産学連携学会関西・中四国支部　幹事　石塚 悟史（高知大学）

関西・中四国支部では、地域が共有する課題を解決し産学連携の促進に向けて、産学連携の事例や研究成果について情報交換を行い、かつ、地域内の会員の交流を深めるために、当該エリアの方々が産学連携の事例や様々な研究について発表できるよう研究・事例発表会を開催しています。

平成２７年度は、平成２７年１２月１０日（木）、１１日（金）に、高知工科大学永国寺キャンパス多目的ホール（地域連携棟４階）で「第７回研究・事例発表会」を開催しました。今回は、発表件数が２８件で、参加者は５１名と過去最高を記録し、大変盛況な発表会になりました。開催プログラムと予稿集については、関西・中四国支部HP（http://www.sgrk.shimane-u.ac.jp/j-sip-B150/）にまとめられて公開しておりますので、是非ご覧ください。

今回は発表件数が多く、初めて２日間に渡って開催することになりましたが、大きな混乱もなく終了できました。ご協力を感謝申し上げます。関西・中四国支部の発表会でありながら、岩手、山形、群馬、富山、宮崎、熊本など支部のエリア外からの参加もあり、また、高校の先生からのご発表もあり、支部エリアや分野の枠を超えた連携の広がりを感じさせる会となりました。発表内容も、産学連携による個別事例やその解析、知財マネジメント、コーディネート活動、人材育成・教育など多岐にわたり、活発な意見交換が行われました。情報交換会にも多くの方が参加され、発表会で足りなかった熱い議論が続けられ、交流が深められたようでした。

今回の発表会も皆様方のおかげをもちまして、当支部の発表会を成功裏に終了することができました。心から御礼申し上げます。次回も平成２８年１２月に開催を予定しております。多数の皆様が集われますことを期待しております。

会場の様子

発表会会場となった高知工科大学

高知県における産学官連携の拠点

TOPIC 2

北海道支部セミナー「『食と健康』イノベーション」を開催

産学連携学会北海道支部　代表　荒磯 恒久（北海道大学）

北海道支部セミナーをHoPEと共催

北海道支部では2016年3月23日札幌市で、「地域を育てる食と健康イノベーション　～高知と青森の戦略～」をテーマとするセミナーをHoPE（北海道中小企業家同友会産学官連携研究会）例会と共催で開催した。

講師と演題

①「食品の健康増進効果の検証は安く、速くできる！」
　石塚 悟史氏　高知大学地域連携推進センター副センター長、産学官民連携推進部門長 准教授
②「“寿命革命”で実現する短命県返上社会のフューチャーデザイン ～弘前COI拠点が創る『健康シンギュラリティー2022』～」
　山﨑 淳一郎氏　弘前大学 研究推進部長

セミナー概要

当日の千歳空港は猛吹雪、山﨑先生は雪の合間を縫って30分遅れで着陸、しかし石塚先生の飛行機は函館へ避難した。石塚先生は函館から特急で札幌をめざし、無事「交流会2次会」に合流し「未来イノベーション」について十分に議論することができた。冬の北海道の自然を相手にして、この結果は大成功と言って良い。

セミナー参加者は46名、属性は図1に示すように、産：５２％、学：２２％、研究機関（道総研など）：１３％、官・支援機関：１３％と、北海道らしいバランスを見せた。講演では急遽2倍の時間をこなすことになった山﨑先生から弘前大学のCOIの取り組みをじっくりと聴くことができた。塩分過剰摂取の短命県に”寿命革命“を起こす弘前大学の取り組みが短期間に活動を全県に広めていく姿は迫力があり、今必要とする活動を支える体制とコア人材、中期的視野に立った学の研究開発が主旋律と基調低音のようなハーモニーを持っている。この基調低音には健康へのビッグデータ解析の新たな手法開発も含まれ、演題に含まれる「シンギュラリティー」へ向けてやがて主旋律へ展開されることになろう。

質疑では北翔大学学長、西村弘行先生からのビジネス面への質問に対し、県の企業がそれぞれ持つ強みをピンポイントで発揮する戦略を取っていること、また㈱ウェザーコック専務・産学連携学会理事の山本一枝氏から地元企業に興味を持ってもらう上での工夫について質問があり、健康志向のお弁当屋などと話をする中で意気投合していく事例などが紹介された。さらにCOI組織構成上、リサーチ・リーダーとプロジェクト・リーダーに加え戦略リーダーを独自に設定し企業や自治体との連携を強めている点が成功を収めている経験も紹介された。

講演の様子は右記URLのYOUTUBEで限定公開している。(https://www.youtube.com/watch?v=nzXwjqztl2E)

未来イノベーション

交流会での意見交換に加え、交流会2次会では合流した石塚先生を加えて、「未来イノベーション」の方向性が議論された。今回のセミナーテーマは「食と健康イノベーション」であり、この分野の発展が世界的にも重視されている点は明らかである。さらに、未来は「物質的豊かさ」より「心の豊かさ」を与えるものがイノベーションの大きな流れになり、それが未来社会のパラダイムシフトとなるだろうとの考えが、石塚先生を中心に議論された。産学連携学会はこのような議論でも我が国のオピニオンリーダーになるべきであろう。

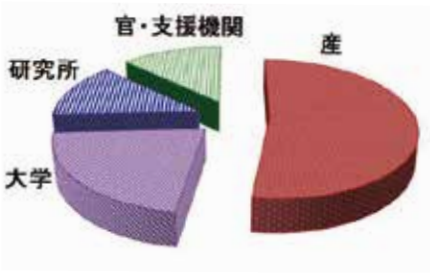

図1：セミナー参加者の属性

図2：山﨑先生（左）、石塚先生（右）

図3：講演する山﨑氏

輸出管理DAY for ACADEMIAの共催

輸出管理DAY for ACADEMIA（EFA）が2月26日に芝浦工業大学豊洲キャンパスを会場に開催されました。EFAは、2013年3月に第1回を開催し、今回が4回目の開催となります。産学連携学会は初回から共催機関として活動しています。今回は「Smart & Cool Export Control」をメインテーマに、午前の部では「大学における技術情報管理のあり方」、午後の部では「産官学の輸出管理の連帯への期待と展望」をテーマにした講演を行いました。その後、「大学における濃淡管理の現状と課題」と題したパネル・ディスカッションが行われました。

会告

産学連携学会が主催、共催等で開催したイベントや産学官連携活動事業についてご紹介します。

諸報

開催日	イベント名	開催地
2016年　1月28日（木）	主催　第2回産学連携学会リサーチアドミニストレーション（RA）研究会	東京
2月　4日（木）	主催　産学・地域連携シンポジウム―地域連携の多面性とその条件を探る―	宇都宮
23日（火）	主催　産学連携学会北海道支部セミナー 地域を育てる「食と健康」イノベーション ～高知と青森の戦略～	札幌
24日（水）	主催　第18回お茶の水コラボレーションセミナー	東京
3月11日（金）	主催　学金連携システム研究会 第15回研究会	新潟
16日（水）	主催　産学連携学会九州支部 産学連携懇談会・産学連携ネットワーク会議	熊本

ご案内

開催日	イベント名	開催地
2016年 6月16日（木）・17日（金）	主催　産学連携学会第14回大会	浜松

発行日　2016年3月
発行所　〒182-0026 東京都調布市布田2-50-2コーポ栄101
（株）キャンパスクリエイト調布ブランチ内
特定非営利活動法人 産学連携学会 事務局
発行者　小野 浩幸　　編集主幹　川崎 一正
編　集　内島 典子・永冨 太一・馬場 大輔
URL　http://www.j-sip.org/

FAX.042-441-1809
E-mail j-sangaku@j-sip.org

編集後記

今回の特集では、6月16日、17日の2日間にわたって開催される産学連携学会の年次大会と産学連携学入門テキストの発行について取り上げました。年次大会、テキストは実務における情報共有の場・媒体として産学官連携にかかわる全ての方々に活用いただけましたらと思います。また、次号から、産学連携学会の団体会員様をご紹介する企画をスタートいたします。こちらも皆さまの更なる連携の強化・拡大の一助となればと編集者一同準備を進めております。どうぞ楽しみにしてください。

編集担当　内島典子（北見工業大学）

プロメテウスの火

人類は火とそして知恵を授かり、
しかし未来を知る能力を失った。
代わりに得たのは、希望であった。
今、私たちは破壊と創造の火を燃やす。

お知らせ

【産学官連携活動写真募集】
産学連携学会では、みなさまからの産学官連携に関するお写真を募集しています。ニュースレターで、ご紹介いたします。産学官連携による人材育成や開発商品、セミナー、イベントなどの活動情報を広く発信しませんか。
ニュースレターでの掲載をご希望の方は産学連携学会事務局（j-sangaku@j-sip.org）までできるだけ高解像度のお写真とともに200字以内のキャプションを添えてご連絡ください。みなさまからのご連絡、お待ちしております。
【産学連携学会のメールマガジンでの情報発信】
産学連携学会ではメールニュースを配信し、「イベントのお知らせや公募情報等、産学連携に関する情報をお伝えしています。会員のみなさまへの情報の配信をご希望の方は、news@j-sip.orgあるいは産学連携学会事務局（ j-sangaku@j-sip.org）まで情報をお寄せください。
バックナンバー：http://j-sip.org/mail_news.htm